

「モノ造り」と「生きがい大学」

k. y

1、モノ造りとは？

文明の歴史は、人類のたゆまないモノ造りの積み上げたものを見ているような気がします。人間生活の全てがモノ造りであり、アートもモノ造りなんでしょう。先だって、モノ造りのオリンピックが行われて、極めて広範囲な分野で工具等の世話になりながらも、最後は手の感覚に頼る微妙なモノが造られていました。それこそ神業に近い腕の持ち主ばかりが競いあったのですが。聞いた話ですが、初期の新幹線車両の前部の膨らみは板金工が腕一本で叩き出したとか。金型もしかり、和菓子の押し型もそうだし、伊勢型紙も職人のワザ。伝統産業はみんなもの凄いモノ造りの集積です。外国でも中世以来のパイプオルガン職人や楽器制作・石工・・・職人の世界。

郊外に移り住んで外界との交渉を避け、晴耕雨読・アート三昧に浸って自分の世界に生きる人もいます。日常生活の行為をすべて手造りで押し通す（電話・携帯・パソコンの世話にならず）ことも出来る時代でもありません。多くの人達と交流しながら便利な道具を活用し、わずかな時間ではあるが自分の為にモノを造る。いわゆる手の温もりが感じられて、ほのぼのとした心を豊かにしてくれるモノ、その創作過程や結果として出来上がったモノを側において至福の時が過ぎせ、さらに創作意欲が湧いてくる・・・そして仲間とワイワイ騒ぎ・・・自己満足？

人によっては、書物を読んだり、旅行をしたりして見聞を広め、豊かな精神生活を楽しんでいる人がいます。スポーツに没入する人もいます。いつまでも仕事から離れられず趣味としている人もいます。他人がどの様に見ようと頓着なしに何でも造りたがる人がいても良い。画家が絵を描き、小説家が物語を書き、作詞・作曲家の行為などはモノ造りとは言わないのだろうか？カタチになるものを作るのがモノ造りというのだろうか？前置きが少し長くなりましたが、私が体験した「いきがい大学」を通じて「モノ造り」を考えてみたいと思います。

2、私にとってのモノ造りの原点

皆さん方も経験があると思いますが、小学生の頃、糸巻きの周りをナイフで削って歯車を造り、ロウソク・割り箸・輪ゴムなどを使ってのタンク制作。さらに雑誌の付録で針穴カメラや鉱石ラジオの組立。中学生になったら図工や職業家庭の授業が楽しくて、太い青竹を割ってその円弧状部材を引き出しの蓋にした箱や、仕口加工のチョーク箱など造った記憶があります。父と一緒にわらを切り、土をこね、竹で編んだ小舞壁を仕上げたりして小さな勉強部屋（1.5m×1.5m）を建てたことが懐かしく思い出されます。この部屋を大学4年生まで使っていました。



父がラワン材を買ってきて細い溝を掘り、フレームを作り2mmベニヤを差し込んだパネルを、仕口と木ねじで繋いで引き出し付きの両開きの洋服タンスを作ったり、廃材を使って道具箱や、繊細な細工のたばこ盆（実測して透視図法で立体図を作成した）を作って愛用したのを良く覚えています。

結婚してからは子供の成長に合わせて、妻と一緒にその時々イベント対応や必要に迫られたり、子供達との遊びを通じて色々なモノ作りを家族で楽しみました。

高度成長期の繁忙の中でこんなにも楽しんでいたのだなあーと今さらながら驚いてしまいます。仕事もちゃんとしていたのかな？

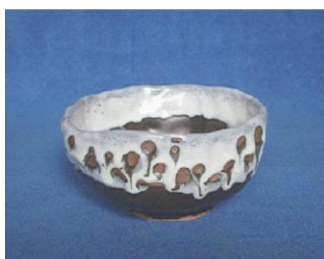


### 3、いきがい大学

私は退職してから自分で何かを造りたくて「ものづくり大学」と思いましたが、高齢者向けではないので、(財)いきいき埼玉が運営する「彩の国 いきがい大学」の2年コースの美術工芸科に入学しました。

(600字のレポートによる選抜)他に健康福祉、生活環境、ふるさと伝承の科があります。すでに水彩画や油絵を描いている人も入学していましたが始めて経験する人もいました。卒業したら地域のボランティア活動に参画してもらおうというのが大学の主旨ですし、卒業後はクラブ活動の延長や各科の専門性につながるボランティア活動をしている人が多いです。美工は平均年齢が65歳の元気組の男女24名がクラスメート。共同作業や討論などでそれとなく想像はつきますが、過去の職歴などは一切話題にしない前向きの仲間です。

授業は毎週一回で一般教養が90分、専門授業が100分、クラブ活動が100分、大宮の北にある伊奈まで通いますので、1日仕事です。自治会活動もあって、学園祭、歓送迎会、親睦旅行や飲み会など役割が廻ってきます。授業日以外にも自主的な集まりなどで出かけることも多かったです。



美工の専門授業は一年目が、デッサン・彫塑・水彩画・陶芸の基礎。二年目が、油絵・版画・日本画の基礎をそれぞれ2ヶ月～2ヶ月半づつ習い、卒業後に好きな分野を続けるようにとのことです。習う方から見ると中途半端になってしまいますので心して学ぶ事が大切です。初めて経験する科目がほとんどで、かなりプレッシャーを感じながらの2年間でした。クラブ活動も盛んで自らメンバーを募って自主的に立ち上げます。



一年生では授業とは別に「自主研究」があり、学期毎に仲間が順次発表しました。自分の日頃興味をもっていることからテーマを決めて、A4で2枚のレポートにまとめます。発表形式は自由。私は「おりがみ-1枚の紙から」として折り紙の話をしました。二年生になると「課題学習」と称して、2グループに別れてテーマを設定して半年かけて共同研究を行いました。我々のグループは「和紙」をテーマとしました。

手始めに埼玉県小川町で60cm×90cmの楮(こうぞ)100%の手漉き和紙造りを体験しました。それなりに「自分が漉いた紙」が出来ました。ご多分にもれず多くの伝統文化は産業として存亡の危機にあり、和紙も同様です。王子の飛鳥山にある紙の博物館や栃木県の烏山和紙を訪ねたり、全国の主要和紙産地にアンケートで状況を把握したりして、和紙の持つ寿命(洋紙はせいぜい200年、和紙は1000年以上)の長さや風合い(癒しや和み)などの特徴を知り、「暮らしの中に和紙を!」のコンセプトでレポートをまとめました。我々のモノ造りは自ら漉いた紙を使ったランプシェード造りと何枚もの和紙を柿渋で重ねた型紙に「サクラソウと蝶」をデザインして彫って藍染めをしました。



この年齢になって仕事以外で共同研究？もどきの作業を行うとは思いませんでしたが、かけたエネルギーの大きさに十分に見合うだけの達成感を仲間と共有できました。

昨年の春に卒業して以来、毎年一回の仲間展・全国の「和紙の里」を巡る旅、スケッチ会、ハイキング、アート鑑賞などを行いながら、それぞれが高齢者や児童達へのボランティア活動や博物館でのイベント支援など幅広く活動しています。勿論、ほとんどのメンバーは絵画・版画・写真・陶芸などを楽しんでいます。我々は16期生（全員で130名）ですが、すでに3000名（東松山校を加えると）を越える卒業生がおります。勿論物故者もいますが前向きな意欲を持った高齢者集団です。

私にとってのモノ造りとは多くの仲間・家族と一緒に「いきがい」を感じる手段？共同作業？のような気もします。人によっては切磋琢磨して専門家（アーティスト）のレベルにまで到達する人もいるでしょうが。

皆さんはどのようにお考えでしょうか？